真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士if～

のんびり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士ｉｆ～

【Ｎコード】
Ｎ６０１８Ｎ

【作者名】
のんびり

【あらすじ】
真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士～のｉｆ物語
鉄さんが風間ファミリーだったらのお話。

第0話『プロローグ』

――――鉄一族。

古書に曰く、彼の者たちが戦場で振るう剣は、その名が示す鉄でできた鎧する容易に両断したという。

その力、まさしく一騎当千なり。

――――――――――――――――――――――――

神奈川県川神市にある武道総本山である川神院。

鉄一族が陰とするならば川神一族は陽である。

鉄一族は血族だけでその強さを高め続けようとしているのに対して、川神一族は教えを乞う者を拒まず強さを高めていた。

故に、古き考えの鉄一族では進化は止まり、『鉄幻十郎』以外では川神院師範クラスに敵う者はいなかったのだ。
そして、鉄と川神の開祖たちの仲が悪かったのが起因して、両家は８００年以上の間犬猿の仲であった。

しかし、若かりし頃より好敵手として互いに競い合う内にいつの間にかに友情が芽生え、無二の親友となっていた現鉄家宗主『鉄幻十郎』と現川神宗主『川神鉄心』には両家の確執など関係なかった。
十代より四十代の今日まで約三十年来の付き合いで、月に一度は来ている茶の席で二人は話していた。

「幻十郎よ、忌まわしき歴史を我らの代で終りにしないか？」

鉄心は唐突にそう切り出した。

「そうだな。頭の固い老人たち・・・・と、言っても俺たちもいい歳だが・・・・まあ、それはともかく、鉄家の老人たちの影響力はもう限りなく零だ」

電話を受けた時の声の様子から、幻十郎は鉄心から重要な話があることを予測していた。

だからこそ、鉄心に言われた問いに直ぐ答えを出した。

「川神も・・・・似たようなもんだ。それに交流稽古と称した潰しあいもいい加減飽き飽きしていた」

川神家も鉄家も交流稽古で、将来有望な者が武道家として再起不能になったのは一人や二人ではない。

詰まらない意地や面子を守るために老人たちが、潰しあいを進めていた。

「そうだな。それに、このままでは両家が共倒れも十分ありえる」

幻十郎は頷く。

「幸い・・・・川神ではほとんどの者たちが鉄家との友好的な関係を望んでいる。関係を新にするなら良い時だと思う」

「鉄家も同じだ。無駄な争いを望む者は少ない」

「ならば・・・・」

鉄心の目に躊躇い色が僅かに浮かぶが、それを振り払うように目を閉じた。

そして、躊躇いが消え、決意に満ちた目がゆっくりと開かれた。

「子のため、孫のため、弟子のために・・・・共に『罪』を犯してくれるか？」

「ああ」

幻十郎は鉄心の言わんとしていることは、言葉にせずとも理解していた。

故に、短く答えて無言で席を立った。

幻十郎と鉄心が『罪』を背負うことを約束した日からちょうど1年後、鉄と川神は友好関係を結んだ。

その際、書面にて約定をいくつか交わした。

闇討ちや多数で一人を襲うことの禁止、交流稽古では両家から必ず立会人を出す、等だ。

なお、これを破った者にはそれ相応の罰が待っている。

約定が交わされてから今までに・・・・禁を犯した者はいない。

――――――――――――――――――――

――――１０年後　川神院

「おお！　九朗、息災じゃったか？」

鉄心は不機嫌そうな顔で近付いてくる少年――――鉄九朗（くろがねくろう）に笑顔を向けた。

歳はまだ7歳。

天賦の武才を持ち、『武帝』と呼ばれる祖父の鉄幻十郎と『武神』川神鉄心をして天才を超える『鬼才』の持ち主として将来を期待されている。

「うん。鉄(てつ)じいも元気だった？」

九朗はお爺ちゃん子であり、幻十郎に着いてよく川神院へと来ていた。

川神院に来たのは久しぶりで実に一年ぶりだった。

「うむ、変わりないぞ」

「そう。ルーとシャカは相変わらず仲が悪かったけど元気だった」

鉄心だけでなく、師範代であるルー・リーや釈迦堂(しゃかどう)刑部(ぎょうぶ)とも面識があった。

「九朗一つ聞いてもよいかのぅ？」

「なに？」

「お主が右手に掴んどるのは何じゃ？」

「ゴミ・・・・池にでも沈めようと思って」

九朗は即答した。

たが、それはどうも鉄心にはゴミに見えないのだ。

「ワシにはそれは人間に見えるじゃが？」

九朗は右手で掴んでいるゴミをチラリと見ると、

「鉄じい、もうろくした？　どう見てもゴミだよ」

九朗は断言する。

「・・・・いや、まだまだもうろくはしとらんよ。九朗が掴んどるのはワシの孫でお主の一つ年上の百代じゃ」

「そうなの？」

「できれば離してやってくれんかのぅ？」

九朗は少し考えこみ、やがて右手をパッと離した。

「・・・・イタタタッ」

地面に落とされた衝撃で気絶していた百代が意識を取り戻した。

「モモ、お前は九朗になにをしたんじゃ？」

「九朗？」

百代は鉄心以外にこの場に人がいるのに気が付いた。

すると、百代は目を輝かせて言った。

「お前は強いヤツじゃないか！　じじい、こいつを紹介してくれ！！」

「・・・・名は鉄九朗。ワシの親友の鉄幻十郎の孫じゃ。モモより一つ年下じゃよ」

「九朗、お前に惚れた！　付き合ってくれ！！」

「却下」

抱き着いてきた百代をヒラリと躱し、九朗はすれ違い様に拳を見舞い百代を気絶させた。

―――――――――――――――

「フムフム、なるほどのぅ」

「原因は百代にありますヨ」

「俺としては九朗のほうが気になりますがね」

気絶した百代を布団に寝かせた鉄心は、家に行く途中で師範代のルーと釈迦堂が現場を見ていたと小耳にはさんだために、道場に顔を出していた。

「剣は九朗の誇りじゃ、それを馬鹿にされれば・・・・温厚な九朗が怒るのも頷けるわい」

「いくら強くともまだ7歳ですからネ。煽られれば感情を抑えられなくて当然でス」

「それに馬鹿をやったガキにはチョイと痛いめにあったほうがいいと思いましてね。九朗のやりたい用にさせましたぜい」

「私も同じ意見でス」

「うむ。だが・・・・モモは全く懲りとらんようじゃがな」

「それどころか喜んでましたヨ」

「九朗はこれから大変になりますわな」

武才を遺憾無く発揮している疾さと力の技。

小細工など通じないまるで修羅の如く激しく、防御など無い攻撃一辺倒の戦法。

その才能と戦法が自分と重なる。

故に、釈迦堂は九朗を気にいっていた。

釈迦堂は愉快に笑う。

川神百代という天才に出会った修羅――鉄九朗――が、どのよう

に進化するのかが楽しみでならない。

（まあ、成長を見れないのは残念だがな）

この日から1週間後、釈迦堂は川神院から姿を消した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6018n/

真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士if～

2010年10月10日22時00分発行